和布刈
望月
半蔀
粉川寺
葛城天狗

二

和布刈

ワキ 今日早鞆の神祭、盡きぬ御
代ぞめでたき
抑是ハ長門国
早鞆の明神に仕申神職乃者也扨
も当社に於て御祭様々なる中
にも十二月晦日寅の刻に和布刈
乃御神事とて今夜寅乃時に至門

て龍神御身も守護し四方よの
いく年と右りご時節海中に入らく
水底乃和布刈は神なる借へ下の験
當年ハ不思儀の奇瑞岩の間に信
心を起し御神事をとて執行ハたやす神
有かたやけ早友の神乃祭年の
きはめの御祭とハなほまる荒玉乃

年の志めをいたみ心ハ君のためなる
乃野よ出てつかれつくずまつち
のほるもあふ年ハくるゝとみよりあれ
和布刈乃かきよ乃神祭かずゝろとい
し極まよ君乃恵を祈あかりく
天地乃ひらきし代ハ久雲の神と
君との御影の乃なみよめるるも

ちはやふるをしの君子られゆく年あまるや
かりかりやそれ往律りのうらにおいて
神前乃御祭振すれとも仏のやとを
の神祭世界する川とやらそあるとて
ずしかりけれは以て感應みたれめう
紀めの花をかりて浪とかざしの手向
幸慶子ある神心撫てよもるらかゝ

明けてまさにみさ見は神よい尼結
縁となさよみよ所なかやかさを乃
ぐはさいは舟よからをたえ夜打指
物あまり乃志るまなにとゝまる甲裁有
つやうちさうそれことの手向
まきしく鬼拙やおかゆゑけまえを
和神のきまへみ御手向をとりくれる數れ

うちやいふ成人やなし〔ツレ〕是は賤し
きわさの身にして世渡る業よりあらぬなうさはあま
おかたの手向とさへられたるあり〔シテ詞〕秋は
ある年経てもとめかねつつ漁猟乃
阿こきをあまりてゆく賤しき者なるかあ
ばうらみん為かく作り〔ワキカヽル〕中く
あまやうろくみしとかしまそをき

ぬれしうらみ〔シテ〕あまのいはれをくはしく語れ
とも〔和歌〕和光のうちなくうけあはき
らかなるまつや天地の開けし神代乃古
とくみちくずまつほちるきみへそうずや
まつ代揚現あらわれまゐる名称
〔上音同し〕海原やさすらいせうゑほとりとめくく
しほひく潟をみえてあれはやとまる

安千島沖乃鴎をむれ立やすみ松
雲井の鴎をさへ見えねばたゞ玉章の
ぎしの関をもとおらぬこゝろを担
申やく天地開闢乃古代より
てみのみこと豊玉姫と契りをなし
海陸のなからをしめしその御
産の時も玉をとめみてゝすまひの

ふかく産屋をそへてわが姿をば
つゝみし事あらはれ恥て御納給ひ
みことの御子をみつて捨給ひ
我も去時しつとぞいひて故郷へ
ふるさとのおきのよびのまへ
あきらけずとまとうかこ
ちぎりなく海路の通ひも立かくれ

彼の玉ひし御子を捨て豊玉姫ハ竜
宮ゟ入給ひぬ夫を彼御門ハひさしく鵜葺
乃附ふきあはせずの尊
をそむきまゐらせひをさきまみえさせ皇
も神代乃政をよびやごとなれ
神まつり神悪善さ勢りあまや
かゝるひさしき雲の上ゟも八下界へ
龍神もながれかすみ四季まうらにみちき
蒼海をも陸地となし此国乃長門
乃かよひをなしてもあさかざまみにこた
うらもこゝろあるとなく嘆きに
や心のごとくかなひ結縁をさ
まり海乃人の拝ひ乃ちすれ毎さ
上中
今を行ふをうつしへきごとくも毎をかのへ

めくり

久かたの天津乙女の雲のそて
かざしの袖を手向まする又夕地かれ
ゆふづゝの光れハ波路の底よりを
竜宮に於ゐあめのかざしてハ
かゝるの天津乙女も雲ゐのまもハ錦は
花の浪りかきれ入にしきりてやがく
まいりをちたるもみさいたまは神

華なり給へハ虚空に音楽聞
ゆよ和してかうきハてらし異香
薫じ龍女ハ波をもかざしそめそめ
がくはをも立まふ袂の玄猶よく
継うのみの時いつりとも嘯くやがて
ちやうとの竜吟まきれハ雲起り
雨ともありあらもなり鳴動して沖

竜神
より龍神あらはれて
まれゝう頭をさげて和布刈の
可以多底をとうらむ ちとみ庭きよきに
これるきの磯あつし めかりかう
まれ沖よりも浪 沖よりも
波とよみまきまりをけ屛風のごと
たくさわおくにまさて海底の
神は平となり 神めぐりおまいり
振たてゞかまをもちて出
向をつうし供をそうへ半町ちやう
其の海底の和布をかりとりかへり
終に其波跡ははるかにみちて
またもとのあら海と成にける波
白妙乃かうぶる和布田のたてまつる

雲の浪烟の波風海上にたちまち
又は大蛇の風海上にたち波又は蛇体
は竜宮に引入して失せにけれ

望月

かやうに候者は近江国守山の宿
甲屋の亭主にて候扨も某本主
者は信濃国の者なりしが去子細
有て此甲屋の亭主となりて従者
の旅人をとゞめ身命をつなぎ
候今日も大名の御泊りにて候

露の間清く成りにし姿をせきとめる
もと付きやと落ちぬ浪乃淀まる
まで過ぎし聲やきうらぬ心ゆ
是は信濃乃国乃住人安田乃庄司友
治と申しし人其妻や子は
我も其の夜治は同じ国乃住人の
乃秋長にあへなく討たれしおりまに

多かりし従類も散々になりつゝ剰
むなしき枕子乃花若独り残し置
せしも敵乃所縁の恐しさに故郷
みをも遁れ立出でて行衛定め
ぬ旅枕を住法路や月をともなひの
夢のうちにもせめて今古里の
ばかりの標立まよひ来て此の所の者

さむ成揺れ程の康乃うさ間守山
乃宿に着にけり　急候ほど
にごろ出る山の宿に着て候
此所にて宿をかりうやと思ひ候
めやに申候揺人にて一夜の宿
をお借し候へ　シテ詞　安き間の事にて候
扨是ハ何方よりの御出にて候ぞ

女　のふ是ハ信濃国よりまかり出たるもの
にて候　シテ　不思議やおん身にてさうら
てハ何方をたづぬる人にて候ぞ
物ぞ某の古への主君の行方をた
さまさまへも待見参を得度く
久しく候ハゞいつしか痛はしく候
さ候やらん某が名を尋ねて力

をと付下さんやと存ながら御様
人に申べきやうなし信濃の国より
と参りよりまいりへ御目にかゝり
たるやうに存　女や是ハ何者も
あらさ者なれとも福よ思ひもよらぬ
事なれハ　ミテ何をと御挨拶も作て
光真為て　おきよへし見て社

古へ御目に在住の事ありし小沢の刑
部女房の事にて候へ存まして少々生あれハ親
若殿にてハ思召の女房が古法園殿に
ゆうれハ此宿に落ちて参りたり候かく
御目にかゝり候ての何面目もなう
女房
うちて候へ　相良子へ乃小沢乃刑部
女房が是也なりやと計りにて涙

まだきよりかな也今ハ行さきとうらむ

今是ハ安田乃庄司友治の妻や

みれバ果まなみ　父よおもひきる心地

去らバ花若小沢よ引付ハ　別れし

うき見乃面影の跡らもなくハ恨めしや

これハ夢ぞ見る現かものぞ覧ちと一手を

取りつし　今さらバ行衛もしらぬ

四

ひとへのふく　三世の契りかれうら程と契

むかし情も是なるまやうきへんおもひ

我まかしく　ゆう嬉きたかく

別うら椋と思ひてし　是ハ信濃

乃国にに住人も月の行末みらくは

同国の住人安田乃庄司友治とと申者

子どもなくあくらつき生害させし始る

されば此十二年の間在京仕り處又は此

ましたる縫急度さし出申候ひしの由

安堵の御教書を給はり候ての為

をわしと先祖は國信濃より下向仕

處同じ江戸吉原寺山の宿に着て

候今夜は此宿にとまらうずるやとおも

ひ候て御前に參り候

夜は此宿にとまらうずるへし宿をかし給へ

じ然る子細の候間同國の名をとは申

さず候　是長ては都より大名此

宿に御着ありて候は宿をも借すまじ

らずやらにてそ　先き同の事此方

へ参られ候へ　相模人の御名字をとは

何と申人ぞ御座候ぞ　是は信

濃の國にかくれもなき大名にて月
殿とおもひそこに給ひ見し給ふ　ミテ　心ゆかぬ
言語道斷乃子細也それは我數に
よその人の心にも方々同しく御子息郎
若殿此座にましませしはゆめにも花
王の成御親の敵にて月の御かうてん
子の成ばやうて此中にまやとはは

いはん若殿ひそかにうかゝひ此程
今は此屋に御入御めかよひまで今月
の此屋へり来ゐらるゝ所に　女　何月
と給ひや　ミテ　聟君は是は天の与へる也
所となげかずもかも怪しくしたふ今は姫の
中に討おさへ御本望たつきさせ申
らせうすゐしては御心安く思召

されハ世の中に御二所ある文殊
者も御目にかゝりやとおもひてさらに度
思案仕りたる事なれバ今此宿に
まゐり候ハめぐりこそ候へ御行の
若しうらへきさ夜にまされ杖に寺り
里菩若殿に御手をひかれまいらせ候
ひとへ向ふ御出あれバ其人ハ杖を抱き

て酔出彼者に酒をまゐらせ候へし
ば行よてもしさへ御諷ひあまたと申
候てぞと御うたひて酒よさへ酔候
ひ舞所をまゐらと詠ひ候へと舞せ寸
其みて候へく 女「さらに酔にちか
寄りて給りさへ シテ「何をも其り
御伺きさへ 女サシ「嬉しやあら面白の事れ

叶はぬ盲乃法師と出立てハ　子「あら
さらぬ業をも成乃為　女「竹乃細杖ハ
きつまらく　音「彼蝉丸は古へくだ
召したるをも書延乃盲は身延アれて
来月しも数ゑの影は後しも盲はいなく
とらへまんの後をまの影乃葉あらう
盲目乃身の懐とはいふ世はめられ松人へ

よく／＼　シテ詞「世はよし夢と思ふなん　松「何
みえ候ぞ　シテ「此藁屋乃事をなどや作り
見ぬ宮河下向ひてし何が私の為よ
酒もと物まうしまうてん我らいまぞ雲
御申ゐへ　松「心持は懐ア下よにこの
藁の亭を此下向見ぬ宮中にゐて
御橋をも物せしまうてん　宰「此方へ

ござんせ　いつにてもござれ　何事なりと
おそ　是非人（音）いふなる人にて
ござる　ちよつと是ハ此宿よりおやま
こせうてんが扨れ乃御旅人の御気乃
時ハ慰ミて酒ひまでござんしやう御前
にうくそそとはうらいせしへ　日本一
のるすみそてんやうてやよきもろう

てござんすよ上ござる　何なりとござ
よ御ハ此宿よある目ゑらうせう
ござらしゝ寸面白くうるよ虫とや
ほうきせうれし　世界とらしく
長てんぎよ是非人（孝）御前ときよ
てござれそばたしらしする和やと一姫
し御うれしく　一万箱王の親乃

かゝるさゝせとうつたる所を謡ひ候へし

ツレ いや〳〵思ひもよらぬ事にて候 シテ 何故

せよとて ツレ 是非〳〵其謡を所望

仕候ハゞ一万箱王か親の敵討たる所

をうたひまへよし申されけれはまた

御前にてハいゝことなくやと申て候

シテ 何の苦しう候へき急ひてうたひ

候へ ツレ さらハ今仰られたる所を

謡ひ候へ クリ 丈か手をひろけしハいかにこ

の日にて鷲諸鳥よりすぐれしかと

鳥ハちいさけれども虎を害する力の

跡 サシ 家に伝の三郎か子に一万

箱王とて兄弟の人有けるか

当年やうつの時とよ父をいとこに

討をつて院より日行時来つらく七ハ
五つよめしうへどもおかり心にも
父乃敵をうらやと思ひの多り
せうこそ宗気よハお隆健しある
時あらくいまや持佛堂よ集めて
兄乃一万香をも薫苑をも仏りぬ
まかれ気出す世箱王ハ本尊をそうせつく

ごゆまりてづらにて兄ころも名をおぼゆる
乃名をきゝ我敵工藤と申なれば敵を
ひけさを縄をとらへや抑ほをみらこて
だから世紛ようらくそれいばきをとかりかり
ては首をも打落さんと申せハ兄乃
一万見をも受て涙くしばいらほ
みそて佛をいバ不動と申かゝさぬらば

五歳といふときより父母へ佛みらく
ましはしとかやめいける刀をさやに
さしはさみ経へ高山弘誓敵を討ま
給へやいさゝ討よ聟は何事を
御さいつさ候そ法用心乃時はるよ
てはよ是はなにさまきゝ者といさい討よ
ミやん頼よ猶よ子細を何なれ
いなく頼よせみて候ば此者乃ひら
をやしたる彼よいでよへむさまかぬる若を
ちを打はとゝへはつせとうふまもれ
こやらずふし日本一乃と打て
よゝうゐせすうほどゝんづくにやよ
候ば是なにきたま御兄よのうへはつせを打
へきようしとやは伴こゝろへ東ましあせ

よりへいつにならふよきまゝにすべし惡しく
はやしをも打作也又其主は行
かくも能はならず拍子を前
はらへ云面白がらせてやならぬ
ずに其主の是は下手なる者也
又は其主は拍子の上手なるよし
をや作りてと一指御能久是は

下手なる者の筋ならぬやうを作り
思ひ自らよらぬやうにて人ひらす
御能久此上は御意にて拍子
ぞと前にてまはりを作りて作
此儘にていふてにて候はゞ拍子以
をかはきてしまらぬやうにてんでその
同じ此下手なる者はやしを打

せられん　吉野龍田の花紅葉
更科越路の月雪
てんハ時をしる雨村雲や凌すれ
鞨りに秘曲乃面白さ一ッくゞ招くめ
さる盃の酔をすゝめハいとゝ猶眠
をし来る斗也　去禰よくおき
よしとちゝぬきをして頭ハ八

ちどりてやうてと見ちり袖を被
まじ立舞きりさにたちかまはしよあて
かゞ花をもよこめよきするをもし
柳是ハ何者そ　御弟乃討し安
田の庄司が家の花若秋そうし
相亭臣とみしハ猶まましまかまよ
秋をとりえかみたるそ　小沢乃刑部

女房よ意趣ありしとひかたく
ゆきすきひゞきけるかれなきれた
太刀さしそへて此年月のうらみ
のをはらし海をそそるれしは月よと
て打よかりしを討すきまし
角をく本望をとけぬまいつく成ちく
不立ちくわが子孫よ傳へ今の世まよ
ぞ名のかれぬ御ほまれ弓矢めでた
きし成にけり

半節

甲打

是ハ都紫野雲林院ニ住居仕僧
にて候扨も我一夏乃間花を立ぬるや
安居をもはや今日に成つるほど夏よ花をも立
何方の花の供養を先行ばやと存候
立花仏浪乃手だい非情までも成仏とて又
ちり山花の廣披に開きてありがたさいと

上哥

いつも山をいでゝいまだ出し蓮一葉
妙典の題目たるべし結縁はひろき草
木國土悉皆成仏道

シテ下

手にかけたる
さまざまなる立花も三世の佛の花なれや

ワキ詞

不思議やな今の女性夕顔の草花をよそと
志ばらく見つる中が志ろき花のさまの
独言しきれまやをきたらばいづる
花を立おきて

シテ詞

愚の御僧れにかれ
だうれちゝ花の折あるにおとうれをきと
御経をきゝる去ら程かはめてまた貝
志さ垣ほよりうたまは志ろきめでたきめ
羽りおりしに見れば夕良乃花のかゝくは

ワキ上

宮を
ありしゆふがほの花のあやしいかなる

シテ詞

人ぞ名のつらきとて升には志ろしめさる

扨ハ有けし花の陰より参りたると
梅ハ此妙法にあひ久しき花の供養に
むかしありし花の名をば付ても名に顕れ給へ名をば
有かなきかの跡に成ぬ昔乃そのまゝ
行方乃宿ふ 常ハさかしき塵に埋もれ
五條わたりと夕顔の花の上ハ知れず
きしまし 夕顔の面影をも有さ

終乃咲く花の陰にかゝりきりく
あだし数に随ひて五条あたりに来て
見えぬるおそき音の方は何がしあらん
ゆかりも夕顔乃瓢箪しばしばむなし
草顔淵の巷に茂し 藜藋深く
とざせり夕陽の残晴あらたまる窓をとう
うつくされ 去らぬまゝにつれづれの邑

雨さんくうとはまそてうら日を かゝそて
も袖をうらむる廬山乃雪の明ぼ乃
上哥 そのうちにも山かつのきはの垣
志る人乃あらざりし志るしやわれ乃出ぬすさ
乃気色や 宮物をも見る風乃たよりをと
荒れ行垣かりし世の夢の姿を見えんと
菩提をとふく弔の や 山乃端の空も

志らで行月はうはの空にて絶えし
あまりに夢のうちに峯へさ や 山賤の垣ほのあ
ことわりも哀れ 影をうつしけよ 扇子の
地 頃の姿をもまたんとあれば 跡をよりさすらう
地 ゆふべの ありしと思ふ夕顔乃花の
蔀をおしあげて立出る御姿見ればあり
ありし昔にたちかへる 光源氏の

中将とゆゝしハしゝ息の手わざたてつる
かれおもひゝら謙てきけハみよし野や
御嶽精進乃はしめには南無当来導
師弥勒仏とこそ唱へまゐらせて尊きお
法養にこそ時乃思ひもおもかげそみゆう
導き給ふれてこれよりかくてとまれぬ深
山宿とて見えあはれにもゆふつけ鳥の推えて

まつさはきせおもれの花ちまとの袂へ法まつきは
扇乃つまいまうたゝるよ此花を
折てしまはちまね実深くも深く深山の嶺
あきらかまと晝言人よさらみをても
それちら花と含そみよもるてもつる
袖つさよめひよりきてはこまたかさ蟄り
乃ほとのうちらさ乃かく書ねよるをおもへ

やさしやね兎虫乃は中とれおもひを述て
志ら浪乃よるべまでも頼まれし一首
を詠しけるまに持て社
を詠ず
ぞれちともなあだなりけるは ほのぐらくみえ
花の夕良きれのゆふべの花まれ夕影
行のみ宿りへ志らを申つ 常よりも
ゆかしきませて ゆかし付風やるの音

鐘も志つまりぬ 行かへる東雲に
同しも成ぬ梅無きままに夕良乃
中より明ぬるままに ゆめのほの宿りの
出こす節風よ入る花まく夢
とり成とらぬ

粉川寺

平詞
是ハ紀州粉川寺の住僧にて候
扨も當寺におひて年に二度旅人
に宿をかさね大法にて候其一度ハ
今度に相當りて候程に河内とやらん
申しならはし候によつて申さは　ノウクキ粒　同前に
平
海そんのとくわちに於て年に

二度まで人をとゞめ夜の内に一度も
こなたにおあまりて候ほどにかまひて
人を寺中にとゞめ給はず候其分心得候へ
そのあはれをしらぬ松風やくらき聖
の寺にして承り候　加様に候者は都
方の者にて候我多年の望にて
て候ほど紀州粉河野山にしまいり候まゝ粉
川寺にまいらばやと思ひ候　都出
てゆくさきの方のちらりと見えければ
ず津の国川は是とよ川風もあまり
才まことのおぼろげなる夜ともせ山と
思ひつけて行程に　椋葉良坂に
見えつる家ハ法花般若ちる大聖文
殊を拝み申さんとくだり志をも川き

雲居坂だにいつくしき三国無
双の大伽藍まのあたりに拝む右
うつるよ月の三笠の山の端は
こそ志るく春日野の麓の宮
よまとうけさん春まで紀
こやいまん高城のぐく紛可るん
はる〴〵峯の雲うつれて社のと

きけばおとに行すいあかつきの鐘はあの
あまのたく煙りの立登るをそれと見
渡さはかせいちの森やかまやれ。
とりとりもちや志らまそうく
是は程なく粉川の寺に付てげに〳〵御
堂へまゐらまちるよふいぱいよりある
御前よみ さや日の暮て候ほど経よ侍

に宿をかりて参りけれハ　是てけれ
ハかく塞田に候ハ　阿闍梨に渡し申して
是ハ猟の者にて候ふ二夜の宿をかへ
里やなく候　阿闍梨ちうのまうしらぬ年
に二夜猟人に法宿を参らせ給ひし大法
ある時其一夜かりに一夜をおかりて候
問ば宿を叶ひ候まし　寺供へ法

宿の礼をと思ひてハ候が思ひたち大法
三年に二夜かり人にお宿を申す
きのふ其一夜の二夜をおかりては
猟はいつまでも宿はかなふましき
聖にハ　其礼を申さんためにか
ほどに夜ハ月も面白く候ふ千手堂の前
なたまてまて一夜を明させ参らせ

皆くちゝよりて物語らへ（見）言
いかにや旅人の求は宮もあけぬれは
見もはらん（毛）いかにや思ひとおさおさし
人かは通りはかはみなを帰しやさきては
（上）何といふ人の文をと落しおいたると
やうかよる四ちるハ見親ちかゝし行よ
粉河は利生の事をやはらしまり

えしひらく人かうつるまて仏ひ（み）まる
は日見ふかうさるまれるをも振よ行
菩提はつきすひとつは有様作りまはて
いくある一筆やまいつ分はころつる
かぬもる里ハあるを乃國寺鳴とやかれ
其るようと行はひては寺らは坊
もこのめ乙あるつごろつるをなれ

まあいらひやへ我名ハ梅若と
やはらさくもは痛はしさの物かたりよ
加様に思ひよりてはやさしの人の云
心やいさなき花のすさむは
あはれてはる宿のゆかりこそぞう
まつれたちひきの人の心や
梅何とはつきりまする　其はるまれば只

ムは悲しきは梅か御名の花さう
もしこれよかはんぞうり文字よ
ては昔あさうしと存る　さらハ其
ようやういへ　其てはかうか案内し
ぞ鳴尾のは宿坊はいつくかしそ
忌みうし　高鳴尾の只今は登山
きりと　其ようやとさうもかるかしずよ

やよげに此山まうでは何と
言語道断の登山とてもやあら思白
ようこそや此方へとよはへ長ては
おおの今へはむすへ心のやれぱいうかし
其昔よりてよへくへおれ代に通りし仏世のおり
はるかり時いかうしまうせるよ
ては時は登山けんらくそみはさんとく

みな此山にては礼をつくすと云ふ松
ひかりまかさりよ付ておそあらうやは
みばおいまきおさ老をとまうをまよ給川
はむかしきうおそれ入ぬへし優婆塞
細ろけ給りし今の此山役善云
やはりよ梅枝の方へ出たへは
外の外人まては城よ外外人

侍りても又梅若丸は舎兄ハ比
叡山には童形にていかに出家をとげ
ちごともせず又ひとり有て出家を
はお續なつかうつまらう一宮になりしそ
さんいいてそまへ あさ心あの仁家
是つ中とまゝせんでこふ あら地路
よしそなさめ おそうる古里の

どぶ猿もいきうつやしらつろまやく
さかりはまれ人にまとむる 何事や情
はなる乃月乃都にまさうきにて
べしそあらそきしとゝしれやさしさ
るうへあうし京よりあり男舎をそ
又都人乃心さまはあるつや道す
うつれ里月て宮わまさきうのぬ

ゝゝせひや　トモ詞　ちやちやうちうちて候　シテ　何と
ちや尾の物さまひとやざう次第
いと殊に申さうらふ　ワキ　皆々まく
ばゆう山まゐり狂よばぐ逗留のひらくは
あく申すところへ　シテ詞　はや意まゐり狂よ逗留
よなく何の旅路次よ人も無く歎き給や
さるる山寺世にも高く人を残しめ参りて

人なりける梅ば　ワキ　梅ハけうちつあ
うてはかなしひはましきうあつ是非
もあやはうさまてげんし山寺侍や
さうらうふうしはうよ梅尾みえしこや
ばうりばは門送り何へ　児　心ゆし　シテ　わふ
やはざらくもてよひハ草の枕よぬ
まくん可よばは勝ことようそ一尾さる

さ好ふみつゝげまて世を忘れ家を
出十日あまりに旅衣日も重なりて
れや〳〵さるほどに近く寄りて見れば
かくれぬこおもちそねみよ竹の
つよの庭の夢に二川の末の
筑波の嶺のあらし吹く雨
新やくいつまであるぞ消え

くまりたる事にて候　是てはつかなる坊
へ案内申候　誰にて渡り候ぞ　さる
御方の御使にて候　何事にて候
ぞ　主御方の御使に参りて候　此方へ入れ候へ
是めくらやはれ下れまうし　出度
の御礼の為参りて候　梅若さへさへ人
をいつくまいて存そ　是より流るる　情

は人あれ鳥あるゝ穴日よりあさき人は
あきし池にて出し都もさのみとをからぬ程
よ成なり　音羽山程近し
びぜんはうりなる字あらくはせのよう
家のばし六誠の法名字をば名言
伝へ　こうりな字に付て面白き農
其は程ようてび呉服あのりはへし

よし野山の花見の行幸あればとせ
の中ともめきしもまは石の月よや
まらめこらくも三ご坊の日なすさい
うつよまどこしそのうら流紫気
前よ下野郡金の星としよ可よ習
は庭ちとあらまよ三年切ぎうつうし様さとくろ
すさいてんきはらもてぐろうき

よはるゝこゝやたゝしゝえりまの枝をも
さへはうしきちはよなきは君の代
まぶまいるゆやもきたゆしさしく集
海士まで此所はまたきゞのはなりより
ぬつけつゝまの丸とのかたかうまを
世よはなし山排き事ありたべ人君
まうき人ぬきてやどよのありなげ

まおくるひてもまとのひしようまる
人はうわしすまりぬとおのりうつ拙
しとぺまんぞんのおもむきわつの
浦波あさきこゝや まの丸あるま我
されはあのりと志はゝ道へいる手
そうゆうよ詠しまひうは後
くまる人は事かくもすあのりゝり

ぐまやうしきに世をうつりのだときいそ
とへどもおとにそれありげにまことそいざやなみだ
はるばるあけの鳥ともつきのなごりあかぬ
ねさそりいさひかりてありけん
雪の面白やさそそさきそよ都人の花の袖
ゆきもやせは花を見ありし
花のもとに二八きしの花そてあきさね見え

あきやうらくわかまみうちね
花の袖巻まの花いめらしや
かりうへ思ひ出よおきさふき人と語れ
あひ花あらいまつよきくよね花は
よしうがまつひのあらさかざめの
おそまきあるは袖をしぼりし旅人を
ひく袖もえあかまつまつ遊ふる

去ら代ありうるひろあるく業人者
げにもしやうつるそおばゆる　しけり
この緒乃山まうミ　雲らそ何を
ぶひの宮あまく汎さひハ宮ゑ名
さもやく此名を業はへ　シテ今ハ何をかつゝく
むへき是社枚村弾正のみ郷よ
あらおひまし乃大人の宮ハ　シテ候を

おさなき人の此みちへ入りて候へハ
急ぎ此代仕きとの此事よりぶ
今御逢ひあるまて候　ワキ候ハおさなき
きへ人今の何かのみちによ　シテ中くの
ことわきうまね時さのへとや演ふる
行跡を立てぬ人を詠もて月
のみくされさ乃れ乃はのかおとよ世

折くことよまきましやわらく
遊ひのあまりれよすか有し
情ハ家乃玉伴ひさ言葉の花もつきせ
ぬあこうかれ

葛城天狗

法乃為にと篠懸めぐる山まゐ
山をとまるよ 是ハ峯入せる峯の
客僧ニて候 我此家生乃山伏たち
を伴ひ只今峯入仕候 急がう候
きれや高間岩根の朝あらきつく苑
かとみて白雲れゆく気寒き嵐そ

きうひおべしとよべき旅よやがて
なし法みとこそ承りたれ音乃遠をしい
とりやくいつはらくへ作らし良
又渓可よ面し夜〻心静よ勤をす
志めうもそれかし　さうくたら山
路つ行まし時うあるしきつたりさるを
いせむつまれ可ふきくはうりせいを

動うしてけりしきそうずりのさう
くせし秋雲がゐるり月意心まされ山
洞やある　秋観念乃眼の前よへぶ三
窓乃月まさやうにしてむさうくと河
れ柳節よ忽然と就はきのもを見
まし又ざきしかつきあら秋あり陪才
つくさうの法力かえざかさうり代優ん

具足さし其志大会ハつゐると 帝ハ
四わらぐ我か行力をさへきむとて
魔軍ハ盡乱ゑかたるお鬼なり
さよ法性の月ハ曇らぬ山陰よ照き
出れ名付るのれ シテ是ハ此山かとて
拇こしせめる大天狗乃眷属なるよ
然れようことを所退よ小事と 云顔出

こゝに待ぬへと 夕れ雲を凌しく
あしきまに北高根よりからうきんの
声ふて帰りまとつくれ谷峯も響
き流まる山彦乃声いふ入てさせり
たちもく 山河草木震動して風
吉木かれて盤石を崩す天狗さて
志つり心をみだれく計也 扨是ハ此

山より峰に飛めぐれば大天狗なり
ふきや高根より吹みだしく。あらし
こがらしうずまく雲より顕出る
大天狗は。あしに鋼の爪はえて。
両眼日月にことならず　旋陀摩訶
嚕遮那娑婆多耶吽多羅吒干𤚥
行者の持力に降されくだかれかけ

責られ行者の縁へ。此時岩屋は鳴動
しばし大石左右へ開くとみえしがそのく
けんぞく二行に列て役の行者
あらわれ出給ふ　世者や我は是ぞ
日域より末法に仏法を守護し流せ
させまいれ開山役の行者を抜くも大天
狗は君を守らむ　われら高根より

のほりまれたぎうく音羽の山つめ
給ひさしくに打ふき苦がみを経へれ
ますゑりまうずれの谷よおちきる
を行者いそ川をわたりをしくしう
まや神國さりなど仏法よおほまりけ
をなしやぐり給へさそへうなれ
佛法守護神とあるべしと約諾か
たき岩根をかきわけゆき及ぞ
そくいきしそくをとめひ給ひ優婆
塞ハ眷属をともなひ給ひしよかし
くりよそへ入たまふ

右之本者觀世太夫織部
以章句真本今亦新令改
版者也
寛政十一己未歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二條通御幸町西入町
山本長兵衛